
りんぐ

伽藍堂その弐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

りんぐ

【Nコード】

N3102K

【作者名】

伽藍堂その式

【あらすじ】

リングの貞子さんと恍けた青少年の話。ホラー的要素は皆無。

第一話「この呪い、未だ有効につき――」（前書き）

ノリで書きました。もとのリング、らせん、ループでの設定をこれでもかというくらい無視しています。

原作を尊重したい方は読まないことをお勧めします。それでも大丈夫な方はどうぞ。

第一話「この呪い、未だ有効につき——」

十二月二十二日。

どこもかしこも中途半端に発展し、これといった見どころがない田舎町——国中県、石丸町。

午前八時。この何の変哲もない街で、オンボロ自転車をギコギコ言わせながら走行している青少年——宮沢礼二郎は、肩からずり落ちそうになった灰色のショルダーバックをかけ直しながら、込み上げる欠伸を噛み殺していた。

今年で十七歳になるこの青少年は、現在通っている石丸町立高等学校の学ランを着ており、寒さ対策のため、中に黒で薄地のパーカーを着込んでいる。

首に巻いた学校指定の紺のマフラーに顔を埋めながら、礼二郎はぼんやりと昨夜の出来事について思いを巡らしていた。

十二月二十一日、午後七時十五分。

『いよいよ今日だな、我が友、宮沢礼二郎』

「君の声をこの時間に聞くたびに殺意がわくよ」

石丸町と、その隣町である花岡町を分断する小丸川付近にあるリバーサイドマンション。

このリバーサイドマンションは礼二郎の父方の伯母が管理している者であり、両親を共に交通事故で亡くしている礼二郎と、そのふ

たつ上の姉、礼奈を引き取る形でこのマンションに住まわせている。だが、現在姉の方は、高校卒業後、すぐに男をつくってこのマンションから出て行ってしまっているの、実質礼二郎が一人でこの広いマンションを使っている。

部屋着である黒のジャージ姿の礼二郎は、キッチン横にあるちやちな冷蔵庫から牛乳パックを取り出しながら、携帯電話から聞こえる数少ない友人の声に答えた。

「——まあまあ、そう気に病むなって。で、どうよ？そろそろ時間だけど、何か周囲に変化とか起きてねーか？」

「……。例えば？」

牛乳をテーブルに用意していたコップに並々と注ぎながら、礼二郎は気のない感じでやや興奮気味の友人に問い返した。

「……いや、例えばってお前、何か怪奇現象的な何か、だよ。あー、ほらポルガーなんとかって奴とか」

「……。ポルダーガイスト？」

「そう、それ！」

「あるわけないじゃない、そんなの」

礼二郎はコップの牛乳を啜りながら、テレビのあるリビングへと足を運ぶ。

「……。お前さ、もしかしたら今日で死んじゃうかもしれないのに、えらく素気ないな。何か俺ばっかテンション高いの、つまんないんだけど」

先ほどからずっとローテンションで返す礼二郎に、友人が不満をストレートに告げてきた。

「だって——」

「——あん？」

「ありえないじゃん」

「——うおっ！？そんなばっさり言わなくなっただっていいだろ？」

「言いたくもなるよ。ホント、こんなしょうもない」

「おいおい、しょうもなくはねーだろうが。一昔前にまことしやか

に流行ったネタだぜ？どうなるか気になるだろうが。だろうがよ」

「だったら自分で試せってんだよ」

『やだよ、ホントに死んだらどーすんだよ！』

「……………。もし死んだら、絶対化けて枕元に出てやるから覚悟しなよ」

かなり心を込めて言った台詞だったが、友人はそれには気付かず、へらへらしていた。

『出れるもんなら出てみやがれ。俺、お前相手だったらビビらない自信あるわ』

「うわー、今すぐ殺したいわー」

そこまで言って、礼二郎はリビングの椅子に座ると、妙に肌寒さを感じ、テーブルのリモコンを取ると空調の温度を適当に上げた。

『……………』

「……………」

『……………』

「……………」

『はあ、このやり取り、前にもしたな』

「正確には、今日で七回目だよ。このやり取り」

『いい加減、飽きてくるよな』

「そう思うなら、電話してくるなよ」

『へいへい。ま、そろそろ時間だけど、お前には何の変化もないようだし？やっぱあのビデオはガセだったみたいだな』

「一週間前から分かっていただけだね」

『まあ、そういうなよ。俺はこの一週間わくわくできて楽しかったぜ』

「君の好奇心に毎度巻き込まれるこっちの身にもなれ」

礼二郎はやや憤然としてそう言うのがはがばと豪快な笑い声が耳を打ち、思わず携帯電話を耳から遠ざけた。

『んじゃ、また明日な！明日は終業式なんだから、遅刻すんじゃねーぞー！』

「こっちの台詞だよ」

こちらの返事も聞かずに電話を切った友人に、引き攣った笑顔で礼二郎は携帯電話をテーブルに置いた。

——異様なほどの静けさが、宮沢宅をゆっくりと包んでいく。

リビング以外の部屋はすべて電気が消えており、リビングから漏れるわずかな光で周囲の部屋はかろうじてその存在を知らしめている。

隣人の生活音すら入ってこない、耳鳴りすら起きそうな静けさの中で、礼二郎はゆっくりと椅子から立ち上がると、テレビの前にある水色のソファに改めて腰をおろした。

自重で体が後ろに反りながらも、視線は一切テレビからそらさず、先ほど友人の話していたのが嘘のように顔面蒼白になっていた。

口は真一文字に閉じ、眉間にはかなり深い皺を寄せ、礼二郎は食い入るようにテレビ画面を見て——もとい、凝視している。

彼が緊迫した表情で見ているテレビの下には、使い古しのVHS再生用のAV機器が置かれ、電源が入っているそれには、中にビデオが入っていることを示している。

そのビデオの側面に貼られたタイトルは——

——呪いのビデオ。

そう、友人の言うように、一年前、爆発的に流行った、見た者は一週間後にビデオの映像にある井戸から出てきた女——貞子に、呪い殺されるという呪いのビデオだ。

そのビデオを宮沢礼二郎は一週間前に見ていたのだった。

そもそもそれを見るにいたった過程は至極簡単なもので、先ほど

電話していた友人が近所のごみ山から拾って来たものを、礼二郎が預かったのだ。

友人が学校でビデオを見せびらかしているとき、礼二郎は遠目でありながら気づいてしまった。

――あれは、本物だ。

ベトリと粘着質のように貼りついている重い気配。

それがあまりにも濃過ぎで、ビデオの周囲の空気が澱んで見えた。

幼少期から不思議なものをよく見る体質である礼二郎は、それがどれだけ人に害があるものかもよく知っていた。

なので、友人にはなんとか適当な理由をつけてビデオを譲ってもらい、捨てるつもりでいた。

しかし、一週間前のこの時間、友人は礼二郎の家に遊びに来た際、そのビデオをこっそり機器に差し込んでおり、無情にも予約再生のセットを行っていた。

「はあ、下手すると死ぬかもな。つか、絶対死んじゃうよ。マジで恨むぞ、この野郎」

予約再生をばっちり観てしまった礼二郎は、最初の二日は必死になって呪いの回避方法を探した。

でも見つかった解決策は周囲の人間に危害を及ぼすものであった。

――つまりはダビングして他の人に見せる。

これが、自分が助かるたった一つのやり方のようなだった。

しかし、礼二郎は方法がそれしかないと分かった時点で、自分の生存するための努力をあっさり放棄してしまっていた。

開き直った。

諦めた。

彼の選択に対して言い方はいろいろあるだろうが、要は他人を犠牲にしてまで守らなければならぬほど、自分の命に価値を見いだせなかったからなのがつ。

そしてもう一つ理由があり、それは彼自身が死への羨望を心のどこかで感じていたからだ。

何故そんなものを感じるのか？

何故無意識に近いところで死ぬことに妙に積極的になるのか？

おぼろげに分かるのは「姉のかけ落ちが原因な気がする」と言うことだけだった。

礼二郎の姉——宮沢玲奈は、しばらく前に急に男ができたと言いだし、動揺する礼二郎を残して男と一緒に姿をくらました経緯がある。

以後姉からの連絡は一切ない。そして、礼二郎には、姉がかけ落ちした数日間の記憶がすっぽりと抜け落ちており、全く覚えていない。

だからこそ、その抜け落ちた部分に自分がこつも死を羨望する理由があるのだらうと、礼二郎は結論付けている。

「——って、柄にもなく恰好つけてみたはいいが、死ぬのはやっぱり怖いなあ……」

昔から靈感体質のせいでいろんな霊や怪現象を間近で見てきた彼だが、こういう得体知れない呪いの塊に殺されることが確定しているというのはやはり尋常ではない恐怖だ。

そもそも、今こうしてテレビと相對している自分が、普段のへたれの自分とどうしても一致せず、恐怖に苛まれながらも死を求めている自分自身を疑問に思うことで、なんとかバランスを保っている状

態だ。

このバランスのお陰で、叔母やクラスメートに恐怖と動揺で押しつぶされそうになっている脆弱な精神を何とか隠し通すことができた。

「遺書、OK」

リビングのテーブルに載っている遺書と書かれた封筒をソファに座ったまま無意味に指さして五回目の遺書の確認をする。

「ベッドの下のエロ本の処分、OK」

遺書はあるが、恐らく自分は変死体で発見されるため、警察は事件性を調べなければならないはず。

当然この室内も調べるだろうから、他人に見られたくないものはあらかじめ処分した。

「——もう、いつ死んでも完璧だな。部屋もちゃんと綺麗に片付けたし」

この一週間で独り言を言う回数が爆発的に増えた。

呪われていると分かっている状態での静寂は、本当に苦痛でしやうがないのだ。

——ザ……——ザザ……——ザザザザ……。

「きたあああああ——！」

ついていないテレビの画面にいきなり砂嵐が混じり、その砂嵐の合間にどこかの井戸が映っている。

そして、その井戸からにゅうつと白い腕が二本、緩慢に伸びあがる。腰まで届くような長い髪で顔を覆っている女が井戸の淵から現れ、奇妙な体の揺らし方をしながらゆっくりと這いずってくる。

礼二郎の心臓は、もうこれ以上はないほどの心拍数を叩き出し、運動もしていないのに急激に呼吸が上がっていく。

死への恐怖と——得体の知れない高揚感が礼二郎を包む。

「う……わ……」

あげたくもないのに、半開きの口から激しい呼吸と共に、悲鳴を漏らす。

ずり……ずり……ずりり……。

礼二郎は硬直したまま、女の這いずっているその様子が音とともに近付いてゆき――、

そしてとうとうテレビのブラウン管からその血の気のない白い腕が、現実世界を侵食し、礼二郎の前に現れた。

第一話「この呪い、未だ有効につき――」(後書き)

長々と前振りが長くなってしまいました(汗

第二話「呪いの権化と一緒に、礼二郎は困惑す」（前書き）

第二話です。しょうもないです。ようやく本格的に貞子さんを出せました（泣

第二話「呪いの権化と一緒に、礼二郎は困惑す」

テレビ画面の向こう側から奇怪な匍匐前進でやってきた白い長袖のワンピースの女——貞子は、ソファに座ったまま端正な顔を蒼白にしている礼二郎ににじり寄り、足もとからソファへと這い上がってくる。

礼二郎は自分の体を這い上がってくる死の恐怖にまるで抵抗できないまま硬直し、そのおぞましい姿をひたすら凝視していた。

貞子は全身から微かな雨の匂いを漂わせながら、硬直したままピクリともしない礼二郎に覆い被さる様な体勢になると、憎悪と怨念が籠った視線を向け——、

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………あれ……………」

恐らく、この段階で死んでいないといけなはずなのに、礼二郎は普通に生きていた。

どこも苦しくないし、痛くもない。

そんな様子を見て、貞子も死なない礼二郎に若干首を傾げている。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

沈黙がさらに続くが、先ほどのような生死の緊迫した雰囲気はなく、どこか腹の探り合いのような視線を二人は交わしていた。

「……………えつと……………」

「このまま視線を合わせていても何も進展しないと思った礼二郎は、とにかく貞子とコンタクトを取ろうと、緊張で乾き切った口を開こうとして、

「……………な……………んで……………死なない……………の？」

先に貞子に話しかけられて、思わず口を閉じた。

「……………もう……………死んでなきゃ……………いけないのに」

ボソボソと、しかも言葉が変なところで途切れるので、聞き取りずらかったが、概ね貞子が言いたいことは理解できたので、とりあえず思ったことを口にした。

「さ……………さあ？な、なぜ、でしょう？」

「……………一週間……………経って……………」

「え、ええ。経つて……………ますね」

「……………でも……………死な……………ない」

「……………はあ、まあ」

「……………死んで……………よ」

「……………。お、お願いされても困るんですけど」

「……………」

「……………。……………っていつか、貞子さんって口きけるんですね」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

貞子的心なしかムツとした表情になったのに気づき、礼二郎は慌てて弁明した。

「あ、あ、あ、ご、ごめんなさい。別に馬鹿にしたわけじゃなくて……………その、呪いの塊的なものが口をきいたことが今までなかったものからです」

まあ、いま一つフオローになっていなかったが。

「……………」
「……………」

再び、沈黙が到来し、さつきとは違う居心地の悪い気まずさが周囲を包む。

「……………」
「……………」
「……………」

「あ、えーと……………」

内心パニックの極みである礼二郎だったが、この気まずい雰囲気には耐えられず、自分を跨ぎ、覆うような恰好で見下ろしている貞子にさらに言葉をかけた。

「と、とりあえず、僕が何で生きているのか、貞子さんはわからないんですか？」

こくこくと頷きで返す貞子に、礼二郎はさらに質問を続けてみた。

「えっと、僕も何で生きているのかわからないんですが、こうは考えられません？ 貞子さん、実は僕を呪っていなかったとか？」

ふるふると首を振って返す貞子に、礼二郎はぎこちない笑顔を浮かべた。

「あ、あははは。殺す気満々だったわけですね」
こくこく。

「いや！そこは素直に頷かなくていいから——ゴホン。じゃあ、今回以外に呪ったのに死ななかった例はありました？」

ふるふる。

「……………なるほど。なら可能性はありますか？僕が死ななかった可能性」
やや考えて、こくこく。

「あ、あるにはあるんだ」

こくこく。

「じゃ、じゃあさ。そういう可能性もあるんだっていうことで、その、そろそろビデオの方に帰っていただくわけには……………」
ふるふるふるふる。

「えええ！？な、何で！？」

じー。

「……。そ、そんな悔しそうな顔されても困るんですけど……」

「……。いや、あの、あのですね。そんなに見つめられても何なので、とりあえずどいてもらえませんか？」

やや考えて、こくこく。

—— いったい何なの、この人。

のそのそとソファから降りる貞子を眺めながら、礼二郎は半眼で嘆息した。

第二話「呪いの権化と一緒に、礼二郎は困惑す」(後書き)

み、短い(泣

第三話「朝、飯はちゃんと準備しよう」(前書き)

ようやく第二話です。

第三話「朝ご飯はちゃんと準備しよう」

十二月二十二日、午前八時三十分。

「よう！呪いからの生還、ご苦労だったな。我が友、宮沢礼二郎！」
石丸町立高等学校、二年C組の教室に到着した礼二郎は、朝からハイテンションな友人に、げんなりとした表情をすると、そのままつかつかと友人に近づき、無言で彼の額めがけ、デコピンを炸裂させた。

「だあああ！！」

礼二郎の強烈なデコピンに、本気で痛がる友人。

その友人の姿を見て、礼二郎はちよつとだけ溜飲が下がった。

「な、何なんだよ！？来て早々のこの仕打ちは！」

「うるさい。この程度で済んだことをむしろ感謝してほしいわ。ったく」

友人の不満をぴしゃりと言い返し、礼二郎は窓際から二番目の自分の席につく。

「んだよお、全っ然わかんねーっての。……あ。もしかして、ホントに呪いのビデオから何か出たとか？」

この友人は、普段鈍感なやつではあるが、時々こうして核心を突くことを言う。

「ああ、はいはい。出たよ、出ちゃいましたよ、貞子さん」

どうせ信じないだろうということが目に見えていた礼二郎は、友人の冗談に真面目に答えた。

「わーお！マジかよ！やっぱ井戸から出てくんの？」

友人は礼二郎が冗談に乗ったと勘違いして話を広げた。

「そうそう、井戸からにゅーつと出てきたよ」

「あはははは、気持ちわりいなあ。……っ！か、会ったのに何で生きてんのよ、お前」

友人がもつともなことを突っ込んできたので、礼二郎は冗談っぽく

本当のことを口にした。

「聞いて驚け。貞子さんの呪いはウイルスに近し！」

びしつとわざとらしく人差し指を立てて言う礼二郎に、友人はにやりと笑い、

「お！面白そうだな！続けて続けて」

と、先を促した。

「えーっと。つまりね……どうやら、貞子さんの呪いはビデオを見た人間の網膜から侵入し、侵入した呪いは一週間かけて心臓に到達し心不全を起こさせる、というものらしい」

「——へえ、面白いな。お前が作った話にしちゃ、よく出来てるぞ」
呪いのメカニズムを聞いて感心する友人を尻目に、礼二郎は話を続けた。

「ここで、僕がなぜ死んでいないかに話は戻るんだが、あの呪いのビデオを見て生き残れる可能性は二つある」

「うんうん」

「その一。ビデオをダビングして他の人間に見せる」

「一般的な呪いの回避方法だな。何、お前が助かったのってこれじゃないの？」

「違う。お前と一緒にするな」

「馬鹿言え。俺はそんな外道なことほしなげ」

「僕に呪いのビデオを見せた奴が言う台詞か！」

「いいじゃねーかよお、何事もなく生きてたんだからさあ。で？その二は？」

全く悪びれていない友人にげんなりしながら礼二郎は先を続ける。

「……その二。これは貞子さん自身初めてのケースだったらいいんだけど、呪いのビデオを見た人間に呪いの抗体がある場合」

「こうたい？」

「要するに呪いとかを一切受け付けない人間のことさ」

「ああ、なるほど、免疫があるってことか。……ってことはつまりあれか？お前はその免疫とやらがある人間だと」

「貞子さん曰く、そうらしいね」

「へえ。でもよ、それが呪いのメカニズムだったとしたら、わざわざ貞子がテレビから出てこなくても、よくないか？呪いは一週間経てば勝手に心臓に行きつくのならさ」

友人の素朴な質問に、礼二郎は押し黙った。

昨夜貞子に説明を受けていた礼二郎もこの疑問を口にしていた。

貞子はそのことについてもちやんと話してくれたが、内容はこちらの耳を疑うものだった。

——私も……ホントは……意味ないって……思うんだけど……だから出てこないでいると……私の……存在意義って……何？って話になっちゃ……うの。

本末転倒甚だしい話である。

七日目に出てくる呪いの張本人な貞子さんは、実はお菓子のおまけで付いてくるちゃちなおもちゃのような位置づけだったのだ。

さすがに内容にふざけが過ぎるため、黙りこくっていると、

「あー、さてはそこまで考えていなかったなあ？お前ってホント詰めが甘いなあ」

友人は勝手に誤解して、勝手に納得した。

「ああ、そうだね」

礼二郎は誤解した友人にあえて訂正を入れず、曖昧に笑って頷いた。

あの夜、結局貞子はビデオの中へは帰らなかった。

礼二郎に説明をし終わった貞子は、死人のくせに「お腹減った」などと言いだしたので、やや遅めの夕飯（もともと礼二郎は死ぬつもりだったので冷蔵庫には牛乳しか残っておらず、たまたま残ってい

たカップ麺を出したら嬉々として麺を啜っていた）を食べさせた。
それで調子に乗ったのか、そのまま風呂に入り、姉のお古である白
地のパジャマに着替え――、

「あの……私……どこに……寝れば……」

「――帰ってくれよ、頼むから」

非常に厚かましい呪いの塊に、礼二郎は頭を抱えたのだった。

そんなこんなで結局、今は使っていない姉の部屋に寝かせてきた。
朝、もしかしたらビデオの中に帰ってくれてるかなと、学校に行く
前に姉の部屋を見に行ったが、期待も虚しく、布団の中で胎児のよ
うに丸まっており、顔を覆い隠している前髪の合間から意外と可愛
い寝顔を晒していた。

しょうがないので、朝ご飯が置いてある場所や、自分が帰ってくる
までにはビデオに戻ってくださいといった内容を書き置きして出て
きた。

「ちゃんと朝ご飯食べたかな？ 貞子さん」

午前九時十四分。

ホームルーム中の教室の中で、窓の外をぼんやり眺めながら礼二
郎は呟いた。

――まさか、このまま居座る気じゃないだろうな……。

いくら自分に呪いの免疫があるからと言って、その呪いの塊なん
ぞと同居するなんて願い下げである。

「ねえ、ちよつとつちよつと、何かキモいのが校門前に来てるよお」

「えー、どこどこ？ きゃー、何あれー！？」

「幽霊？！ 幽霊？！」

「えー、そんな訳ないでしょお？」

「うわっ、キモ！」

「何か怖えよ、アレ」

「警備員呼んだ方がいいじゃねーの？」

「ぜってえ不審者だって、アレ！」

クラスの担任である禿頭の教師がムニャムニャとホームルームを続ける中、礼二郎の後ろの席の連中が一樣に騒ぎ出した。

礼二郎はその騒ぎの内容に、何か言い知れない不安と引っかかりを感じ、同時に変な緊張感を覚えながら、校門の方へ視線を向けた――。

「――！！」

そして、そのまま硬直した。

礼二郎の視線の先、校門前には、白地のパジャマを着たまま、不穏オーラ全開で周囲をキョロキョロと見回す貞子の姿があった。

「おいおいおいおい、礼二郎。なんかすごいのが学校に来ちゃってるぞ」

前の席に座っている友人も気づいたようで、好奇心たつぷりの瞳で興奮気味に硬直している礼二郎の肩を揺すった。

だが、礼二郎にはそんな友人に悠長に返事をするほどの心の余裕はなく、ガタンツと椅子を蹴って立ち上がった。

前触れのない礼二郎の突飛な行動に、友人を始め、騒ぎ始めていたクラスメートたちが一斉に礼二郎に視線を向けた。

「え、やだ。アレ、宮沢の知り合い？」

「まさか。ありえねーよ」

「いや、でもさ。メッチャ校門見てるよお？」

「彼女だったりして」

「うわあ、やめろよ、気持ち悪い！」

クラスメートの好奇の視線と棘だらけの発言が、チクチクと痛くはあった。

「先生」

校門から視線を外し、礼二郎は担任教師に向き直った。

「な、何かね？」

教室の生徒たちがざわめきだしたこの状況についていけない担任教師は、礼二郎の緊迫した雰囲気を押され、どもりながら返事をした。

「僕、お腹痛いんで今日は早退させてくれないでしょうか？」

言葉的には申し出の形式をとってはいるが、口調的には完全に命令形だった。

「あ、ああ。お大事な」

「はい。失礼します」

勢いに押され、二つ返事をしてしまった担任教師に一礼すると、礼二郎はシヨルダーバックを引っ掴み、失笑と好奇渦巻く教室から、脱兎の如く駆けだした。

廊下を駆け、靴箱を通り、校門前へ――。

そこには、相変わらずキョロキョロしている貞子の姿があった。

「何やってんですかあああ!？」

姿を確認した礼二郎は、走る速度をさらに上げながら絶叫した。

「ホント、もう、マジで勘弁してください」

「……………」

自宅であるリバーサイドマンションへと自転車を漕ぎながら、後ろに座ってしょんぼりしている貞子に礼二郎は疲れた声をあげた。

あの後、礼二郎は教室から冷やかしゃ野次が飛ぶ中、駐輪場から自転車を引っ張り出し、後部の荷台に困惑する貞子に乗つけて逃げるように学校を後にした。

まあ、冷やかしは冬休みを挟めば、熱も冷めると思うで、あまり心配はしていなかったが。

「……………。ごめんな…………。さい」

礼二郎の苛立った声に、涙声になりながら貞子は小さく謝った。

「……………。いや、あの…………。別に怒ってはいないんですけど、そのなんていうか、来るなら来るでもうちよつと配慮してほしかったっていうか…………」

涙声の貞子にちよつと罪悪感を感じてしまった礼二郎は、まとまりのない言葉を無意味に連ねたあと、話題を強引に変えた。

「で、何で僕の学校にパジャマのまま現れたの？」

「その…………。朝、起きて…………。手紙を…………読んで…………」

「手紙…………？ ああ、置き手紙ね」

「…………朝ご飯がある…………って…………書いてあったから…………キッチンを見たんだ…………けれど」

「うん」

「これかしか…………なかつ…………たの」

そう言つてパジャマのポケットから貞子を取り出したのは、バナナだった。

「うん。あつてるよ。それ、朝ご飯。なんせ冷蔵庫は何にも入っていないからねえ」

につこりしながら礼二郎は頷くが、貞子の表情はいま一つ晴れず、

「あの…………朝ご飯…………これじゃ、その……………足りないの」

バナナを弄りながら、少し恥ずかしそうに言つた。

どうやら貞子は、お腹が空いてどうしようもなくなり、礼二郎を頼つてわざわざ学校まできたらしい。

「…………貞子さん」

「……………。何？」

「君…………。死人のくせに、ホントよく食べるよね」

礼二郎のあんまりな失言に、貞子は眉を吊り上げて頬を膨らませると、礼二郎の背中を思いつき叩いたのだった。

第三話「朝ご飯はちゃんと準備しよう」(後書き)

何とか書けましたが、どうにもしょぼいような(泣

第四話「好奇心は身を滅ぼす」(前書き)

第四話は友人視点編です。

第四話「好奇心は身を滅ぼす」

十二月二十二日、十二時二十六分。

石丸町立高等学校、第二校舎屋上で俺——不知火英斗（礼次郎の『友人』）は、購買部で買った焼きそばパンを頬張りながら、携帯電話をかけていた。

「いやあ、お前、なかなかどうしてあっぱれだったぜ。教師から気迫で早退もぎ取った奴はお前が初めてだぜ？」

電話の相手は、朝堂々と仮病を使って早退した宮沢礼二郎だ。

もちろん、電話をかけた理由は、今朝の妖怪チックな女の詳細を聞きたいがためだ。

『うるさいな。いちいち電話してこないでよ。こっちは今取り込み中なんだ』

電話口から聞こえる不満声に、俺はヘラヘラ笑いながら華麗にスルーした。

「おー！何何？あんな妖怪みたいな女としっぽりってか？！」

『……そんなわけないでしょ。昼ご飯作ってんだよ』

「あのキモ女のために？」

『……あのねえ』

「まあまあまあ！俺とお前の仲じゃん！どという関係なのかくらい教えてくれよ」

俺のしつこい問いかけに、礼二郎はどこか面倒くさそうに、

『……………。あえて言うなら、呪われた関係？』

「は？…………。わけわかんねーんだけど。しかも疑問形だし。もうちょっと分かりやすく、筋道立てて言ってみ」

『何で？面倒くさいだけ』

うわ、こいつついに本音出しやがった。

まったく数少ない友人の一人だというのに、こいつが時々見せる不遜な態度には本当に腹が立つ。

「てめえな……」

文句の一つでも言つてやろうと言葉を發しかけた時に、

『お昼……まだ……?』

覇氣が一切無く、途切れ途切れな感じの女の声が聞こえた。

「おい、我が友、宮沢礼二郎よ。聞き逃さなかつたぞ、今の声!」

俺は勝利を確信するかのごとく食べかけの焼きそばパンを握りつぶしながら、声をあげた。

家に上げているということはやはり奴の女だったか!

『興奮するな。今は僕の母親だ』

「嘘つけ! お前の母親はもう亡くなつてんだろが!」

いい加減、こいつとのつぺりとしたやり取りしていてもしょうがないので、話題の中心であるあの前髪すっぱり女に電話を代わつてもらうことにした。

『お勧めはできないよ?』

「いいから代われ」

渋る礼二郎を説き伏せ、ようやく女と代わつてもらふことになった。電話の向こうで礼二郎が例の女に「くれぐれも余計なことはいわないでよ」と釘を刺している。

本来なら、俺の方に釘を刺すべきところなのだろうが、打ったところで刺さりはしないことを礼二郎はよく知っているようだ。

——だが! あははは! 甘いなあ! 礼二郎、いくら他の所に釘を刺したところでこの俺には通用せんぞ!

口先のエイトマンとは俺のことだ!

今回も根掘り葉掘り聞き出してやるぜ!!

『もし……もし……』

俺が内心息まいていると、何だか猛烈に暗く、か細い声が耳に入つた。

「あ、もしもし? 初めまして。俺、不知火って言つて礼二郎の友人をやつてます。よろしく」

『……。初め……まして。山村……つていい……ます。よろしく』

風体からして、挨拶もろくに出来ないような感じではあったが、小さく聞き取りにくいながらも、返事はしている。

よし、これならいける。

「どうも、よろしく。でさ、ちょっと聞きたいんだけどさ、礼二郎とはどこで知り合ったの？」

とりあえず、こういう会話のテンポの遅い人には、テンポよくストリートに聞いて、考える余地をなくさせて情報を引き出す。

『家』

ほーら………は？

「……ん？家？礼二郎の？」

『うん』

「……。礼二郎のことを前から知ってて、それで家を訪ねたの？」

『ううん、知らな………かった。初めて………会ったの………昨日だし』

「は？——昨日？！」

おい、礼二郎。お前、昨日今日知り合った女と一緒に家でランチとはずいぶん進歩したじゃねーか。

俺はグシャグシャになった焼きそばパンを適当に口に放り込んで乱暴に咀嚼すると、横に置いてあったコーヒー缶を一気に呷った。

「でもちよつと待てくんない？山村さん。昨日初めて会うにしてもいきなり初対面ってわけでもなかったわけでしょ？その辺はどうなの？」

『………つまり………会う………ことになった………きっかけ………ってこと………？』

「そうそうそう」

『それ………だったら………一週間………前に、礼二郎………くんから』

「おおおお！」

何だよ何だよ！礼二郎！女のジャンルはともかく、お前も結構隅に置けないな！

「なるほどねえ。じゃあさ、昨日はその………どんな感じだったの？」

『………？………？………どんな………？』

「あつれ〜？ピンとこない？それとも恥ずかしいのかなあ？じゃあじゃあ、これだけ教えて？昨日は泊まったの？礼二郎ん家」

「……………うん」

礼二郎おおおおおおおおおお！！

お前えええ！お前えええ！！

ついに、ついに男になつてしまったんだなあ！！

俺は興奮のあまり勢いよく立ちあがると、手に取ったコーヒー缶をグシャリと潰し、声にならない叫び声をあげた。

「そうか。そうだったんだね。……………優しかった？礼二郎は」

「？？……………まあ……………」

「そつかそつか。お互い初めてだったろうにな。うんうん。よくやったぞ！礼二郎！」

「よく……………やった？」

「うんうん、よくやったよ。初めてなのにさあ」

「？？……………よく……………わからない……………けど」

山村さんはいったんそこで何を思ったのか言葉を区切り、

「確かに……………死ななか……………つたのは……………初めて……………です」

ボソボソと、しかし確実にそう言った。

「…………………………え？」

俺の思考は一瞬停止した。

そして、その一瞬の思考停止の後、礼二郎との朝の会話を思い出した俺は、頭の中で何かが奇麗に繋がった気がした。

いや、いやいやいやいやいや！！ありえないから！ありえないからあ！

—だが、しかし……。

きっ
かけは一週間前。

今朝の礼二郎の呪いに関する話。

その山村さんの「死ななかつたのは初めて」発言。

や、やべええええええ！！

俺は完全にパニックになってしまった。

「^?！」

——いや、違う。可笑しいのを必死に噛み殺している声色だ。

ひんやりとした緊張感で声が裏返る。

俺は血の気が引くという経験を初めて体験しながら、それでもこれだけは聞かすにはおれなかった。

「——山っ、村っさん！ししし、下のなまなま、名前はあ、なん、何でしょ、うか？」

『……………』

——さ・だ・こ。

「うわあああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああ！！！！！！」

何故か携帯電話を当てている耳とは逆の耳で聞こえたその名前に、俺は絶叫して携帯電話を放り捨てると、泣き叫びながら文字通り転がるように屋上から逃げた。

「礼二郎……君。電話……切れ……ちゃった」

「ほっといていいよ。どうせしょうもないことばっかり言ってきたでしょ？」

「よく……わからな……かった」

「いいよいいよ。理解しようとしなくても。どうせ下世話な内容なんだし」

「そう」

「うん。じゃあ、お昼にしようか」

「……………サンド……………イッチ？」

「そうだよ。持ち合わせのお金で買った材料だから、ハムチーズとジャムしかないけど、量はあるからいっぱい食べて……ってこんなに入るの？五人分くらいあるけど」

「ん……………余裕」

「そ、そうなんだ」

第四話「好奇心は身を滅ぼす」(後書き)

一人称って難しい。

第五話「クリスマスイブとお坊さんは相容れない」(前書き)

第五話です。大した設定は考えていないため、どんどんおかしな方向に(汗

第五話「クリスマスイブとお坊さんは相容れない」

「あのさ——」

「？」

「何か、完全に居座つてるところ悪いんだけどさ」

「……………うん」

「ビデオに帰らなくて大丈夫なの？」

「……………んー……………大丈夫……………みたい」

「…あ、そうなの」

「……………何で…聞くの？……………居ると……………やっぱり…迷惑？」

「別に迷惑ではないよ。まあ、普通なら人を呪い殺している幽霊的な何かなんて、身近に置いておきたくはないんだろうけどね」

「……………じゃあ、礼二郎…君は……………普通じゃ……………ない…んだ？」

「うーん。自分的には極めて普通なつもりだけどね」

「……………。普通の…人は……………自分を……………殺そうと……………した…相手と……………一つ屋根の……………下で……………暮らさない……………と……………思……………う」

「……………全くもってごもつともだけど、それを言うなら殺そうとした相手の家で、飯食ったり風呂入ったりする呪いの塊もどうかと思う」

「……………。えっへん」

「いや、別に褒めてないから。むしろ呆れてるから」

「むう……………そういう…減らず……………口を…たたく人……………は……………呪い…殺し……………ちゃうよ？」

「はっはっはっはー。君の呪いなんぞ効くものか！そんなふくれっ面で睨まれたところで痛くも痒くもないわ」

「……………むうう……………。なら……………これ……………で……………どう……………だ」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………。貞子さん、包丁はやめよ？」

「……うふふ……かーくー」……」
「いやいやいやいや！マジで危ないから！てか、貞子さんがそういうのを持つとシニール過ぎて怖いから！マジやめて！」

十二月二十四日、十八時四十分。

石丸町にあるリバーサイドマンションの一室で、黒ジャージ姿の礼二郎と白地のパジャマにポニーテールの貞子は、洒落にならない鬼ごっこをしばらく続けた後、暖房の効いたリビングのソファに並んで座り、テレビを見ながら全く生産性のないおしゃべりに興じていた。

「テレビつまんないねー」

「……本当に……あつた……怖い……話……とか……やって……ないかな？」

「やってないから、そんな番組。聖夜の前日にそんなもんやってたらこれから家でいちやつこつてカップルの連中から苦情の嵐だよ」

「……そう……じゃあ……人肉まんじゅ——」

「——だあ！やめて！この夕食時にそんなもん放送してたら世帯規模でリバーズだよ！」

呪いの化身、貞子が礼二郎のところに現われて四日目。

最初の緊迫した出会いが嘘のように、この短期間で二人は随分と仲が良くなっていた。

貞子も本来であれば、ビデオに戻っていなければならないのであるが、どうも居心地がいいらしく、ずるずると居座り続けている。そうして迎えたクリスマス・イブであったが、二人はそれで何か意識するわけでもなく、日常化し始めつつある二人の生活をダラダラと過ごしていた。

——ピンポーン……。

だしぬけに玄関の呼び鈴が鳴った。

「ん？誰だろう？こんな時間に」

ソファに座ったまま振り返った礼二郎と貞子は、そのまま顔を見合
わせ——、

「ジャンケン——ポン——！」

お互いが右手を突き出す。

貞子はパーを出しており——礼二郎はグーだった。

——ピンポーン……。

深々と冷え込む中、リバーサイドマンションの一室の前に立ち、
呼び鈴を押したその男は、誰もがよく知ってはいるが、そうそう見
かけることはない格好をしていた。

「あの……。何の用でしょうか？」

ドアについた覗き穴で、普通なら立っていることはないであろう
人物に、玄関のドアを開けた礼二郎は、警戒心丸出しで応対した。

——その男、袈裟を纏いし長身の坊主は、怪訝な表情をする礼二郎
を一瞥すると、合掌の構えを解いてこう言った。

「あなたですか……。悪霊にとり憑かれたというのは」

礼二郎は一瞬何を言われたのか理解できず、

「——はい？」

と間拔けな声で訊き返した。

が、坊主は困惑する礼二郎をよそに、実に低い声で厳かに話し始
めた。

「私は、修行僧の元真と言います。私が来たからにはもう安心です
ぞ、宮沢殿」

「……………は？」

坊主の言っていることが少しも理解できない礼二郎は、

「して、悪霊はどこですか？」

と、勝手に話を進めながら玄関から上がろうとする坊主を慌てて押し止めた。

「何をしていますのです？宮沢殿。私が入らないと悪霊は退治できませんぞ」

「そっちこそ、何をさっきからわけのわからないことを言っているんですか？あと、何で僕の名前を知ってるんですか？気持ち悪いんだけど」

礼二郎にそう言われ、ようやく自分が警戒されていると気付いた元真は、再び合唱の構えをとった。

「なんと……まだ気づいていないのですね？あなたの家には悪霊が巣くっているですよ」

「いませんよ、そんなの。あと後半の質問をスルーしないでください」

「いえ、悪霊はおります！この——何とも言えない禍々しい気配、悪霊に違いありません！さあ、私を中へ案内して下さい！」

「いやです」

腕を組み、きつぱりと断った礼二郎に、元真はややオーバーに驚愕した。

「何を言っ——はっ！さてはあなた、すでに悪霊に取り込まれているのですね！？おのれ悪霊！！滅！めええっ！！」

「近所迷惑なんでやめてください」

合掌したまま「滅」と叫ぶ元真に、礼二郎は冷静を取り戻すと、半目になって突っ込んだ。

「おのれ、悪霊めえ〜！」

「いや、ですから……」

先ほどから毛ほども噛み合わない会話に、礼二郎はだんだんイライラし始めた。

「悪霊！退散！悪霊！退散！」

「あの、これ以上ここで騒ぐのなら、警察を呼びますよ」

「呼びたければ呼ぶがいい！だが、後々後悔するのはあなたですぞ！」

「むしろせいせいしますけど。どうせあなた、霊能者気取りの詐欺師でしょ？」

「な、何をお！？私は由緒正しいお寺である——」

「はいはいはい、能書きはいいですから。……坊主のくせにこんな押し売りのようなことまでするなんて……恥を知ったらどうですか？」

礼二郎の言葉に、元真は羞恥からか、怒りからか、あるいはその両方からか、顔を真っ赤にして礼二郎を睨んだ。

「き、君、失礼じゃないか！私は本物だぞ！」

「嘘は結構ですよ。それに悪霊を感じた的なノリで話を進めてましたけど、あなた、僕の友人に依頼されてきたんじゃないんですか？だから僕の名前を知っていたんでしょ？」

礼二郎の言葉に、元真の顔色が俄かに変った。

「あら？その顔は凶星ですか？いやね、数日前友人にお化けは本当にいますよって感じでちょっとからかったから、予想以上にビビっちゃって。お被いしてもらえってうるさいんですよ」

「……………」

「うちの友人は桁外れな金持ちのボンボンですからねえ。ときどき思い込みだけでこんな風に暴走しちゃうのが欠点で……あなた、あいつから相談料とか言ってどれくらいふんできました？十萬くらい？」

元真は先ほどの勢いをみるみるなくし、すっかり無口になってしまっていた。

そんな元真を余所に、礼二郎はさらに続けた。

「だいたい、イブの日に坊主だなんて、友人の冗談より出来が悪いですよ」

腕を組んだまま、辛辣なことを言う礼二郎に、元真は掴みかからんばかりの表情で睨んだ。

と、その時、リバーサイドマンションの駐車場に一台の白と黒の、パンダのような車が入ってきた。

「な！？警察！？」

驚愕する元真を尻目に、礼二郎は手を振り上げて「おまわりさん」と気の抜けた声をあげた。

元真は礼二郎を一瞥すると、大きく舌打ちし、逃げ出そうと礼二郎に背を向けた。

その時。

「——頭の割れた奥さんによろしくね、元真さん」

その声に、元真がはつとして振り返った。

視線の先には、相変わらず礼二郎がニコニコしながら佇んでいる。

「——て、ててめえ、い、今何って言った……？」

語尾をやや震わせながら元真は聞いたが、礼二郎は元真を——正確には元真の右肩あたりを見つめたまま笑っている。

そつ、それはまるで元真の後ろに誰か立っているかのような………

後ろに。

誰か。

「う……うあああああつあああああああ……顔面蒼白になった元真は、奇声のような叫び声をあげると、礼二郎に掴みかかった。

「君！やめなさい！！」

「やめるんだ！！」

その様子を見て、礼二郎に呼ばれた警官二名は慌てて止めに入り、

元真はその場で取り押さえられ、警察署へ連行されていったのであった。

パトカーを見送り、二の腕を擦りながら部屋に戻った礼二郎は、警察へ電話をした子機を持ったままクツクツと笑っている貞子を見て、首を傾げた。

「どしたの？」

礼二郎が訊ねると、どうやら例の坊主が、頭の割れた女にとり憑かれていることも知らずに、悪霊退散を連呼していたのが笑いのつぼに入ったらしい。

おかげで警察に電話している間、笑いを堪えるのに必死だったと言ってまた笑った。

礼二郎はそんな貞子を見やりながら、悪霊が『悪霊退散』と坊主に騒がれて迷惑していると警察に電話する構図を思い浮かべ、そのあまりのシュールさに思わず苦笑した。

「礼二郎……君も……可笑し……かった……の？」

苦笑したのを、貞子が自分と同じところで笑っていると勘違いして聞いてきたので、礼二郎は満面の笑みを顔に張り付けてこう言った。「貞子さん、今度病院に行こう。君の笑いのつぼは一度診てもらわないと駄目かもしれないよ？」

——次の瞬間、礼二郎の顔には電話の子機が叩きつけられていた。

第五話「クリスマスイブとお坊さんは相容れない」(後書き)

貞子が貞子っぽくないよー(泣)

第六話「何事もほどほどが肝心」前編（前書き）

第六話です。

第六話「何事もほどほどが肝心」前編

十二月二十八日、午前十時。

クリスマススムードもようやく落ち着き、次に差し迫る正月を前に、気持ちを切り替え始めている石丸町。

そんな石丸町のリバーサイドマンションの一室で、礼二郎のパーカーに、礼二郎の姉のお古のスウェットを着た貞子は、ティッシュと輪ゴムをリビングのテーブルに広げ、悪戦苦闘していた。

「こんな……感じ？」

自分があり合わせのティッシュと輪ゴムで作ったもの——てるてる坊主を掌に乗つけて、貞子は首を傾げた。

現在、石丸町はこの季節にしては珍しく雨が続いており、石丸の町民は丸二日ほど太陽を拝んでいない。

呪いの権化である貞子個人は、この薄暗い曇天模様を割と好意的に受け入れていたが、この家の家主である礼二郎は、流石に鬱々とした様子だった。

そこで、この雨をやめさせるべく、貞子はてるてる坊主を作ることにしたのであった。

早く止んでほしい一心で、気がいたら三十個以上出来ていたが、未だ自分が納得した出来栄えには至っておらず、貞子は無心でてる坊主作りに励んでいる。

で、その雨がやや苦手である礼二郎といえば、親戚と一緒に本家で正月を過ごさなければならなく、昨日の夜からこのマンションの管理人である叔母と隣町の花岡町へ行っており、現在は不在。

「一週間後の一月二日の夜まで帰れないから留守をよろしく。食べ物大量に買い込んでおいたから大丈夫だと思う。一気に食べちゃ駄目だからね？あとくれぐれもトラブルは起こさないように」

「私……そんな……トラブル……起こして……ないのに」

三十三個目のてるてる坊主を作りながら、出発前の礼二郎の言葉を思い出した貞子は不貞腐れたように呟いた。

だいたいにおいて、ここ最近あった退魔師絡みの件といい、事を起こしているのは貞子ではなく礼二郎の友人なのだ。

礼二郎の友人がトラブルを起こすきっかけになったのが貞子の存在である、という点を華麗に無視した貞子は、そのまま友人に責任転嫁をしてグチグチと呟きながらテルテル坊主作りを続けていった。

「ここが、宮沢君の家？」

午後一時。少しも弱まる気配のない雨の中、リバーサイドマンションの入り口に立っている童顔でお下げの少女、渦巻樹々は、無機質なコンクリを見上げながら、傘の中で感嘆した。

2LDKでマンション？と思ってはいたが、佇まいは実に彼女好みであった。

彼女——渦巻樹々は礼二郎と同じクラスの女子であり、その可愛らしい容姿とは裏腹に大のカルト好きで、貞子が朝ご飯欲しさに礼二郎の学校を訪ねて来た時、唯一喜色満面だった人物である。

「まあ、流石に中高層ではないわよねえ。セキュリティも超しよば

いし」

そんな彼女が今回、何の脈絡もなく礼二郎家を訪ねた理由は、もちろん貞子に起因するものであった。

それは、貞子が本当にビデオから出てきた化け物であるかどうかを確かめたいという理由だ。

最初学校で目撃した時は何て幽霊じみた人なんだろう！？的なノリではしゃいでいたのだが――現在樹々の横で震えているツンツン頭の不知火英斗が、「あれは本物だ」という発言から完全にカルト好きの心に火がついた。

どうしても、検証したい。

樹々のそんな暴走した精神に巻き込まれる形で、英斗は今、ここにいる。

英斗は、樹々の台詞に一切反応せず、「俺、生きて帰るかな？大丈夫かな……？」と不安そうに呟いていた。

そんな英斗を尻目に、樹々は童顔な瞳をキラキラさせて、

「さ、行くよ！不知火君！」

曇天模様もなんのその、意気揚々と先へ歩きだした。

「……………。うわー。ホントに行くんだあ。俺マジに帰りたいんだけどな」

貞子との電話が未だトラウマになっている英斗は、半泣きになりながら樹々の後に従った。

午後一時。昼食であるオムライス（通称さだオム。礼二郎が命名。何てことはない貞子がつた只のオムライスだが、ケチャップで必ず『呪殺』と書かれている）を食べ終え、食器を片し終わった貞子は、テーブルの半分を埋めるてるてる坊主の山を見て、思案顔になった。

結局、午前中いっぱいを使って、八十七個のてるてる坊主が完成したわけだが、彼女のにきりのいい数字である八十八個には残念ながら材料が一個分足りず、どうしたものかと考えていた。

しばらく宙を見上げて考えていた貞子は、ふと、天井にあるものを見つけた。

それは金属で出来たフックであり、天井から外れないように頑丈に固定されていた。

それを食い入るようにつめた貞子は、何かに閃いたらしく、掌をポンと叩くと、礼二郎の部屋に入って行った。

「表札もないんだ？」

「……管理人の関係者が住んでんだから、必要ねーんじゃないの？」

「ふーん、宮沢君ってご両親とかは？」

「ずいぶん前に交通事故で」

「あ……そう、なんだ」

「うちの学校じゃ結構有名な話だけだな」

「私ら女子の間じゃ、どっちかっていうとお姉さんが男と出て行つた話の方が有名よ」

「…………。まあ、女子の間で広まりそうなネタではあるけどよ。とりあえず礼二郎に姉の話とかすんじゃねーぞ」

「しないわよ。でもそうやって不幸続きなのってやっぱり何かに呪われているってことなのかな？」

「知らねーよ。例えそうだとしても今回の貞子とは関係ないだろ？」

「それはそうかもだけど、何か引かかるじゃない」

「…………。カルト好きは結構だが、下手に首突っ込むとマジで死ぬぞ」

「分かっているって言うてるでしょ。てか、そもその原因はあなたでしょうが。偉そうにしないでよね」

「——ちつ。やかましいわ、このカルト好きが」

「何よ。さっきから貞子にビビりまくっているくせに」

「んなことねーよ」

「——足、震えているわよ」

「うるせつての！」

礼二郎宅の玄関前に来た樹々と英斗は、ドア横の呼び鈴を押しながらそんなやり取りをしていた。

「…………。出ないわね」

「ああ」

二回ほど連続で呼び鈴を押してみたが、一向に出る気配がない。

「留守？」

「…………。あー、もしかしたら正月近いから親戚と一緒に本家に帰ったのかもな」

「でも、ドア向こうから何となく人の気配するけど？」

「…………。そうかあ？」

「ねえ、その親戚の用事ってすぐ終わるものなの？」

「いや、最低でも行ったら一週間は縛られるって去年礼二郎がぼやいていたから、今年もそうじゃねーかと思う」

「じゃあ、やっぱりいいのかな？でも心配するし」

「確かに……そう言われるとそんな気もするな」

「宮沢君って居留守とかする人？」

「あいつはそういうことはしない。いやいやでもちゃんと出る」

英斗はさらに何度が連続して呼び鈴を押すが、やはり反応はない。

「……………」。もしかして、中で死んでるなんてことはないよね？」

樹々のとんでもない発言に、英斗は間髪入れず否定しようとして、脳裏に貞子が過ぎった。

礼二郎本人の話では、貞子の呪いは通用しないということだった
が……………。

「——まさか」

結局否定できず、それだけしか言えなかった英斗に、樹々もその雰
囲気が伝わったのか、表情を固くした。

と、その時。

——ガタン！

中で、明らかに何かが倒れる音がした。

「！」

「！」

二人は思わず顔を見合わせた。

「何？今の……」

「さあ……………」

どうにも答えを出しづらい状況に二人は困惑したが、はたと英斗の
動きが止まった。

「ど、どうしたの？」

「…………いや、何か聞こえねーか？」
「え…………？」

——ぎゅ、ぎゅぎゅ……ぎゅ、ぎゅぎゅ……ぎゅ。ぎゅぎゅ……。

樹々も耳を澄ますと、確かに音が聞こえた。
断続的で、何ていうか——縄が軋むような…………。

——縄…………？

何かが倒れる音の後の縄の軋み音……。

最初の倒れる音が椅子、あるいは何かの台座だとしたら——。
そして、その後に聞こえた軋む音は、つまりは縄に何か宙づりになっ
ているということだとしたら——。

「ちよ、ちよつと、私嫌な予感が止まらないんだけど！」
樹々が青ざめながら、英斗に縋ってきた。

恐らくは樹々と同じ結論に至っている英斗も寄り添っていた。
「ど、どどどうしよう？」

「お、男のくせにパニツってんじやないわよ！…………あ、そうだ、携
帯！携帯電話に電話してみたら！？」

「お、おう」

緊張と恐怖でどもりながらも、来ていた青色のジャケットのポケッ
トから携帯電話を取り出し、礼二郎の携帯電話に電話した。

——数秒後、飾り気の全くない着信音が、ドア向こうから聞こえた。

「ゆ、ゆるぎねー!!」

中から聞こえた着信音に、二人の最悪のシナリオの状況証拠が無慈悲にも積み重なっていく。

「宮沢君！宮沢君！中にいるの!？」

叫び声を上げたまま硬直した英斗を押しつけ、樹々は荒々しくドアを叩きながら呼びかけた。

「嘘…嘘よね」

焦りながら樹々はドアを絶えず叩きながら、ドアノブに手をかけた。

——ガチャリ。

ノブを回した瞬間、いともあっけなくドアは開いた。

「え……」

「あ……」

二人は短く声をあげ、起きたことを処理するのに若干時間をかけたが、慌ててドアを全開にすると、我先にと玄関に上がった。

「礼二郎!」

「宮沢君!」

どたばたとリビングに続く廊下を二人で駆け、リビングへとなだれ込んだ。

「!」

「!」

そこには、金属のフックから延びたロープで首を吊っている貞子の姿があった。

第六話「何事もほどほどが肝心」前編（後書き）

何か長くなりそうな感じがしたので、わけました。

第六話「何事もほどほどが肝心」後編（前書き）

才チを見失ってしまいました（泣

第六話「何事もほどほどが肝心」後編

——やはり、ちょっと無理があつたかも。

貞子は首をつられた状態で、困つたように眉をひそめた。

材料がなくて最後の一個が出来ないのがどうしても気に入らなかつた貞子は、天井の金属のフックを見て、自らてるてる坊主になることを思いついた。

だが実際にやってみると、どうしても自殺者に見えてしまい、ただ首を吊るだけではてるてる坊主に見えないことに気がついた。

——やっぱり、首下の円錐を表現し忘れていたことが大きいのかもしない。

などと、首を吊られながら考えていると、外がやたら騒がしくなった。

先ほどから呼び鈴が鳴っていたことや、礼二郎が忘れていった携帯電話が鳴っていたことは分かつていたが、どちらにも基本出ないようにと礼二郎に言われているので、一切無視していた。

だが、携帯電話が鳴り終わったあたりから異常に騒がしくなり、しまいにはドアを激しく叩き始めたので、貞子は顔をしかめた。

あんまりうるさいので、ちょっと自分を見せて逃げ帰って貰おうかなと貞子は思い、床に降りるために予め手に持っていた包丁で口——プを切るうとして——、

ガチャリ。

玄関のドアが開いた音がした。

そう言えば、早朝ゴミを出した時に鍵を閉めるのをすっかり忘れていたことに貞子は気がついた。

「礼二郎！」

「宮沢君！」

礼二郎の名を呼びながら、勢いよくリビングに入ってきた二人組の男女は、貞子の姿を見るやいなや驚愕し、ツンツン頭の青少年に至っては白目をむいて気絶してしまった。

「ちょ、し、不知火君！？気絶しないでよ！」

お下げの少女が先に意識飛ばしちゃうなんてずるいじゃない的な二ユアンスで、気絶したツンツン頭の青少年を揺すった。

首を吊ったままばんやりとその光景を見ていた貞子は、このまま見ていると仕方がないので、包丁でロープを切ると床に着地した。貞子が着地した音を聞いて、お下げの少女ビクリと体を震わせた。

「……どうも……こんにちは」

とりあえず挨拶をすると、お下げの少女は油の切れたロボットのように首をこちらに振った。

「……………。どう…も」

恐怖で声が裏返りながらも何とか返すことができた少女を見て、貞子は微笑むと、包丁をキッチンの収納ボックスにしまった。

「粗茶……………ですが」

「……はあ、どうも」

リビングのテーブルの椅子に座っているお下げの少女——樹々は、どう見ても不気味ではあるが幽霊とは言い難いほどに存在感のある呪いの化身——貞子に出されたお茶に、どういう表情をとっていたか分からずに困惑しながらも、何とか返事だけはしていた。

ちなみに、気絶した英斗はどうやつても起きないので、このままにしておこうと樹々は言い、それを聞いた貞子は、そのままと可哀そうだからと白いハンカチを広げて顔に乗せていた。

樹々は、貞子によって白いハンカチを顔に乗せられる英斗を見て、きっと宮沢君なら突っ込むんだろっなあと思いながらも、傍観に徹していた。

「で……お名前……は？」

「……あ、渦巻樹々って言います」

「私……は……貞子……です」

「……」

「……」

「……で？」

「——はい？」

「あの……礼二郎……君は…………いませんよ…………親戚と一緒に…………います」

美味しそうなお茶を啜りながら貞子は訊ねた。

「え……宮沢君……？」

「え……礼二郎……君に……用が……あるんじゃないん……ですか？」

「ち、違うわよ」

「……。じゃあ…………何しに……来たん…………です？」

「……えっと……」

樹々は少し困ったように頬を掻きながら、おずおずと貞子を指さした。

「……」

「……………」

「……………。私？」

「はぁ……………まぁ……………」

正直なところ、あまりにイメージと違い過ぎる貞子に、いろいろとどうしてもよくなつてきてはいる樹々ではあつたが。

「……………私？……………」

「ええ。正確には『あつた』だけど」

「？」

樹々は、貞子が出したお茶を飲み、精神的に落ち着いてくると、貞子に言いたいことをぶちまけ始めた。

「何か……………何かイメージと違ふのよねえ」

「??？」

「だって——あなた怨霊でしょう？なんでそんなにはつきり見えるの？そんなにはつきり見えちゃ駄目なんじゃないの？というかこうやって話せて一緒にお茶飲んでるところからしてそもそもおかしいわ。——はっ！？っーか今怨霊としゃべっている私ってどーよ！？やばくない？」

「いや……………私……………に……………言われても……………」

困つたように呟く貞子。

「まぁ、それは置いておくにしても、何かこう……………あ！そうだ、あとこれ何よ？テーブルの半分を占めてるこの大量のてるてる坊主は」
「……………雨……………降ってるから」

貞子の返答に、樹々は大げさに頭を抱えた。

「……………怨霊なのに何でそんな幼稚なことやってるの？しかも何この量。てるてる坊主は可愛いけど、こんなにたくさんあつたら逆に怖いわ」

逆に怖いと言われて、グツとガッツポーズをとる貞子に、樹々は半眼になって呻いた。

——突っ込み所が多すぎて怖くなくなってきたわ。

胸中で愚痴りながら呻く樹々を尻目に、貞子はガッツポーズを解

くと、おいしそうにお茶を啜った。

「……………。何か私の幽霊の概念が崩壊の一途を辿っているわけだけど、つーかあなた本当に怨霊なの？」

先ほどの貞子の態度から、樹々が疑うのも無理はい。

お化けらしくない上に、普通に見えるし触れるのだ。しかもてるてる坊主なんぞを作って一人悦に入っている女である。

疑わない方がおかしいというものだった。

じつとりとした疑わしげな視線を送る樹々に、貞子は自分が呪いの存在であることを疑われていると気付き、

「…信じ…られ…ないの…なら…これ」

そう言つて、いそいそと一本のビデオテープを差し出した。

言わずと知れた呪いのビデオである。

「いやいやいやいやいやいやいや！それは無い、それは」

樹々が出されたビデオから全力で引きながら言った。

「……………何…で？……………見て……………一週間…すれば……………絶対…信じる……………」
自信たつぷりに答える貞子であったが、樹々にとっては気が気ではない。

「そりゃ、あなたがテレビから出てきたら間違いなく信じるけど、でも私、死んじゃうよね？死んじゃうんだよね？それじゃ駄目じゃない。死んじゃったら信じるも糞もないでしょうが！」

ダークなボケをひたすらかます貞子に、樹々は肩を怒らせてテープをバンバン叩きなら言った。

貞子はなぜ自分が怒鳴られなければならないのか分からず、小さく首を傾げた。

と、そこへ、だしぬけにリビングの脇にある備え付けの電話が鳴った。

その音を聞いて貞子は傾けていた頭をバツと戻すと、壁に掛ったシンプルな丸時計を見た。

その時計が午後一時三十分を指していることを確認した貞子は、表情を綻ばせて急いで立ち上がると、電話に应对した。

「……もし……もし……」

『あ、貞子さん？僕だけど。大丈夫？ちゃんとやれてる？』
電話の相手は礼二郎だった。

貞子の行動から察するに、事前にこの時間にかける決まりにしていたらしい。

「大……丈夫……だけど……変な……人……来てる」

『変な人？え、ちょっと待って、誰か上がってんの？家に』

「うん」

——あなたの存在ほど変じゃないつもりですけどねえ、貞子さん。と言いたいのを我慢して、樹々は会話を邪魔しないようにお茶を啜った。

『誰？』

「……………ナルト……………っぽい……名前の……………人」

ナルトじゃなくて渦巻だつーの！——と、胸中で突っ込む樹々。

『……………ナルト？……ああ、渦巻さん？』

分かるの！？分かつちゃうの、それで！？——と、胸中で再び突っ込む樹々。

「あ……………それ……渦潮さん」

『……………貞子さん、無理してボケなくていいから』

「……………ごめん……………なさい……………」

『いいよ、いいよ』

あなた達、何がしたいのよ、何が！？人の名前で遊んでないでさつさと本題入ってよ！

その後、樹々の無言の突っ込みも虚しく、不毛なやり取りが長々と続いたが、ふと会話が途切れ、貞子が受話器を持ったまま振りかえった。

「……………かわって……………くれって……………礼二郎……君が」

樹々は席を立つと、憤然とした面持ちで貞子から受話器を受け取った。

「もしもし？宮沢君」

『あー、渦巻さん？』

緊迫感のない間の伸びた礼二郎の声に、樹々のイライラが更に積る。

「あー、渦巻さん、じゃないわよ。あの貞子はいったい何なの？私のイメージと全然違うし、そもそも都市伝説っぽくないんだけど」

『……………。何だか訳の分らないことでイライラしてるみたいだけど、怒りたいのはこっちなんだよ。勝手に家に上がって、貞子さんに値踏みみたいなことして、挙句ダメ出しって。君こそいったい何しに来たんだよ？』

「うるさいわね。不知火君が生きた都市伝説があなたの家にいるっているから確かめに来たのよ」

『またあいつ絡みか。あのさ、物珍しいのはわかるけど、そつとしておいてあげてよ。見世物じゃないんだよ、貞子さんは』

「大した仲でもないあなたに説教なんてされたくないわ。私はただ単に本物かどうか知りたかっただけよ」

『なら貞子さんがビデオ持つてるから、それを見れば一発で本物かどうかわかるよ』

「いや…………。そのくだりはもうさつき貞子さんがやったから。何？あなた達、そんなに私に死んでほしいわけ？」

『はっはっはっは。そんな訳ないだろう？ただの冗談だよ、冗談』

「……………。そんな棒読みの台詞で言っても説得力無いわよ」
眉間を指で摘みながら疲れたように言う樹々。

『まあ、とにかくさ、本物は本物だから。下手するとホントに危ないからね』

礼二郎に言われながら、樹々はなんとなく貞子の方を見やった。

貞子は受話器を樹々に渡して、手持ち無沙汰らしく、キッチンから持ち出して来たらしい割り箸で、気絶している英斗の顔をクツクツと不気味に笑いながら突いている。

確かにその光景は確かにホラーでカルトチックではある。

——でもねえ。

樹々が見ていることに気づいたのか、貞子は振り向くと、につこりとほほ笑んだ。

「確かに本物よね。危ない存在なのかもね」

「分かっているのなら、ほどほどにして帰りなよ」

「でも——」

「??」

「随所にブラックユーモアを入れてくる割には、何か憎めない人よね。天然というか、妙に可愛らしいというか……」

樹々が言うと、一拍置いて礼二郎は吹き出した。

「好きになっちゃったの？ 貞子さんのこと」

「馬鹿言わないでよ。私女よ？」

「——いや、その前にまず死人ってことを突っ込もうよ」

「あのねえ、どちらにせよその気なんてさらさらないからね、私。むしろあなたでしょ？ それ」

「……は？」

「こんな風に電話してきたりとか……怨霊相手に普通しないでしょ？」

「……」

礼二郎が黙ったので、樹々は貞子に聞こえないように声を落として、さらにたたみかける。

「あなた、貞子さんのこと好きなんでしょ？」

「……………。まさか」

一応否定はしているが、間が開き過ぎだ。

これでは好きですと言っているようなものである。

しかも結構本気な雰囲気を感じ取って、逆に樹々が吃驚した。

「うわあ、本気なんだ、宮沢君。あなたちょっと……いや、かなり痛いわよ」

「な、何のことだよ？」

「しらはつくれてんじゃないわよ。甲斐性なしならまだしも、何で自分殺しにきた怨霊好きになってんの？ 馬鹿じゃないの？」

「だから、違——」

「まあ、でもお、どうやらあの呪いの化け物もあなたのこと、満更でもないみたいよ?」

『……………』

電話口で照れている様子の礼二郎を思い浮かべ、樹々は思わず吐くマネをする。

「じゃあ、これ以上怪奇現象に対して幻滅したくないから私は帰るけど、どうする?電話代わる?」

『……………。いい。もうしばらく留守番をお願いしますとだけ伝えておいて』

「はいはい、了解しましたよ」

樹々は、何やら声が固くなった礼二郎を詮索することなく、適当に相槌をうった。

貞子は、樹々が受話器を置いたのを見て、英斗へのいたずらをやめると、てててーと寄ってきた。

「何よ?」

百四十六センチの樹々は、百六十五センチある貞子を見上げ——もとい睨んだ。

しかし、貞子は一切怯むことはなく、

「礼二郎……………君…何……………か…言…つ…て…た?」

と途切れ途切れの声で聞いてきた。

「……………。あなたの旦那さんなら心配ないわよ。引き続き留守番をお願いしますだつてさ」

樹々がそう言つと、貞子は嬉しそうに笑つたのだつた。

第六話「何事もほどほどが肝心」後編（後書き）

長かった……

第七話「貞子本人が自分のことを全部知っているわけではない」前編（前書き）

前編 中編 後編になりそうな予感がひしひしと（汗

第七話「貞子本人が自分のことを全部知っているわけではない」前編

一月三日。午前一時二十分。

一月二日から日付が変わって一時間と二十分。

石丸町にあるリバーサイドマンションの一室では、二日には帰ると言っていたはずの礼二郎を未だに待ち続けている貞子の姿があった。

「……………。遅い」

暖房の効いたリビングのソファ。

そこでだらしなく寝転がって、絶えず時計を見つめている礼二郎のジャージを着た貞子は、もう何度目かわからない溜息をついた。

日付が変わって一時間と二十二分。

そして礼二郎が約束を破った一時間と二十二分でもある。

——帰りが遅くなるならちゃんと連絡してくれたらいいのに。

ストレートの長い前髪を指で弄りなら、胸中で愚痴る。

こうやって一人悶悶としているくらいなら寝ればいい話なのだが、それでも寝らずに起きているのは、早く会って頭ごなしに文句を言いたいがためである。

帰ってきたら初めて会ったときみたいに這いずって出て脅かしてやる。

ここまで待たせたことへのはらいせか、相変わらずしようもないことを企てていると、だしぬけに玄関のドアが勢いよく開いた。

「たっただいまあー、帰ったよお」

間の伸びた、呂律の怪しい口調で礼二郎が帰ってきた。

——やっと帰ってきたな。よし。

さっそくさつき思いついた初登場の演出をしようと、ポニーテールにしていた髪の毛を解いた。

しかし、どうも様子のおかしい礼二郎は、そのまま貞子より先に

玄関先で倒れ込み、

「うーうー！きつと来るー！きつと来るー！」

と、呂律の回らない口で歌いながら、床を這いずっていた。

連絡も寄こさず散々待たせた拳句、やろうと思っていたネタを先取りされて、貞子は相当なしかめっ面（一般人が見たら恐らく気絶する程度の表情：礼二郎談）で、嬉々として這いずっている礼二郎を見下ろした。

「あや？さだちゃーん！まだ起きてたのお？」

「……さ……さだ……ちゃん……？」

おかしな呼び名で呼ばれ、出鼻を挫かれた貞子は戸惑いながら聞き返した。

「うんうん。さっき考えてつけてみた、あははは。何か愛嬌があつてよくなーい？」

礼二郎は真つ赤な顔を破顔させて、ケラケラと笑った。

「……。頭……大丈夫……夫？……何か…変」

ここにきて、ようやく礼二郎の様子がおかしいことに貞子は気付いた。

「変ではあー、ありませえーん」

床でケラケラ笑う礼二郎を凝視して、貞子はなおも怪訝な表情を崩さず、あることに気がついた。

「お…酒……臭……い……飲ん…だの？」

顔が真つ赤であることや呂律、テンションの高さ、そして何よりも礼二郎から漂う酒特有の臭気。

間違いない。

礼二郎は飲酒していた。

恐らく親戚の新年会で叔父様連中に無理やり飲まされたのだろう。

それはそれとして、未成年の飲酒である。

貞子は大きいため息をつく、怨霊のくせに「子供が……お酒…飲ん…じゃ駄目……でしょう」と礼二郎を嗜めながら、外にほったらかしになっている旅行用バックを引っ張り込んだ。

「飲んだんじゃなーい。飲まされたのお、親戚連中に」

ふらつきながら上半身を起こした礼二郎は、靴を乱暴に脱ぎ捨てながら貞子の予想通りのことを口走った。

「飲ん…だ……ことに…変わ……りないじゃ…ない」

旅行用バックを玄関脇に寄せると、足下がおぼつかい礼二郎に手を貸しながら、リビングの方へ移動した。

「あらあら、ごめんねえー、さだちゃあん」

「そう……思う……なら……自分で…歩いて……」

「うふ。やだあ」

普段ならまずやらないであろう礼二郎の語尾の伸びた甘え口調に、気色悪いと言いたげな表情をした貞子だったが、彼の見せない新たな一面を見た気がして、内心は満更でもなかった。

「ふいー。ありがとーねー、さだちゃん」

リビングのソファまで来た礼二郎は、そのままソファに倒れ込むと仰向けになりながら気持ち良さそうに言った。

いろいろ好き勝手されて怒っていたはずの貞子だったが、その礼二郎の表情を見て、どうでもよくなってしまった。

「どう……いたし……まして」

とりあえず返事をする、礼二郎は満足そうに笑って、そのままゆっくりと瞼を閉じた。

「寝……ちやう……の？」

「んー……」

返事にすらなっていない声を漏らし、礼二郎はそのまま糸の切れた人形のように、ぴくりとも動かないで寝てしまった。

そんな様子を見て、貞子は再び盛大に嘆息すると、礼二郎の自室から白い毛布を持ってきて、彼に頭ごとすっぽりと被せた。

その様子は霊安室に置かれた死体さながらである。

「……説教……は……明日……ちゃんと……する……から……ね……レ
ンヂ」

貞子は、爆睡して死体を演出している礼二郎を腰に手をあてて見

下ろしながら呟いた。

「ううん……わかつ……た……よ——姉さん」

寝返りを打ちながら、発した礼二郎の寝言に、貞子はハツとして口元を押さえ、目を大きく見開いた。

そして日頃から青白いその顔をさらに青くしながら、貞子は逃げるように、彼の姉の部屋へ入っていった。

第七話「貞子本人が自分のことを全部知っているわけではない」中編

一月三日、午後三時四十分。

基本的に冬に雪の降らない石丸町。

その町の商店街は寒風と枯れた植木、そして正月休みも加わって、実に閑散の極みに達していた。

そんな中、細々と営業しているアンティークな喫茶店、エルダン。

その一番奥の席で、長身のツンツン頭な青少年——不知火 英斗と、童顔でお下げの少女——渦巻 樹々は顔を突き合わせていた。

その表情は二人してどこか物々しく、楽しい会話をしている感じは一切ない。

「で？えらく穏やかじゃない感じで僕はここに呼び出されてしまったわけだが、一体何の用でしょうか？」

「全然似てないわよ」

英斗のくだらない前振りを、普段ならそうそうしないような随分と硬い表情で突っ込んだ樹々。

「礼二郎本人からもそう言われた。てか、正月尚早何切羽詰っちゃってんだよ？お前」

いつもと違う樹々の様子に、怪訝な表情をする英斗。

「そう言う不知火君は随分能天気ねえ」

「うるさいっての。これは持って生まれた性分なんだよ」

「そんな能天気な不知火君に、ちよつとだけ重たい話をしたいんだけど、いいかしら？」

「んだよ？付き合ってる男が実はロリコンで困ってるとか？」

「……昔の話を掘り下げるのは止してくれない？あれは私のトラウマなんだから」

「悪い悪い。お前のその神妙な顔はあの時以来だったから思い出しちゃって」

「思い出しても言わないのがマナーってもんでしょ？不知火君はそ

んな風にデリカシーがないから見た目悪くないのに彼女出来ないのよ」

「大きなお世話だ。それに俺がモテないのはデリカシーがないからじゃない。性格が三枚目だからだ」

「……………。どちらにしても威張って言うことじゃないわね、それ」

「……………。まーな」

「……………。本題に入っていいかしら？」

「さっさと入れよ」

「ホント偉そうね」

樹々がそう言つて呆れたところで、エルダンのやる気を感じられない店員が、注文していたモカブレンドと抹茶パフェを無造作にテーブルに置いた。

「すいません、これ、逆です」

モカブレンドを前に置かれた英斗は、樹々の前に置かれた抹茶パフェを自分の手元に引き寄せるとモカブレンドを樹々の前に置いた。

店員はそんなミスマツチな注文にも表情一つ動かさず、小さくすいませんと形だけの謝罪をしてすぐにはけていった。

そんな態度の悪い店員を横目で見ながら、樹々はパフェを嬉々として食べる英斗に、

「そう言う甘党なところもモテない要因のひとつなんでしょうねえ」

と少し馬鹿にしたニュアンスを含ませてながら言った。

「その容姿でブラックを啜るお前も人のこと言えないと思うけど？」

「そうやって人を外見だけで判断しがちだから、不知火君は浅はかだつて言われるのよ」

「……………。その言葉、そのままそっくりお前に返すぜ」

そうして、しばらく英斗はパフェをがつつき、樹々は静かにコーヒを啜った。

「で、いい加減本題つてのは何なんだよ？」

パフェを完食した英斗は、そのガツガツした食いっぷりに嘔吐きそ

うになつていた樹々を半眼で見やりながら言った。

「もうなんとなく分かつているとは思うけど、貞子についてよ」

樹々の言葉に、英斗はあからさまに顔を顰めた。

「うえ……また貞子かよ。いい加減にしてくれよ。俺はもう関わらないって決めたんだから」

全く懲りていないらしい樹々に、英斗はうんざりしながら言った。

「何言つてんの？そもそも貞子が宮沢君のところに現れたのは不知火君のせいでしょ？少しは責任感じなさいよ」

樹々は半眼のまま腕を組んでそう言った。

「本物だなんて知らなかったんだから、しょうがねーだろうが」

「ホント、不知火君つてバカなんだから。………あなたのせいで、宮沢君、相当ややこしいことになってるんだからね」

「……は？———どういうことだ？」

貞子がとり憑いたことを言っているのだろうか？

それにしても少しニュアンスが違う気がする。

樹々は童顔を引き締めると、重々しく呟いた。

「私、この数日間、徹底的に貞子を調べてみたの」

「……お前、このイベントの多い冬休みまるまる使って何くだらねーことやってんだよ？ホント暇なんだなあ」

「茶化すな」

「はいはい。で、何か分かったのかよ？」

「当たり前でしょ。そうでなきゃ不知火君呼んでないもの」

「そりゃ確かに。で？何が分かったって言うだよ？」

「……………結論から言うけどさ……」

「んだよ？もったいぶってねーで早く言えよ」

「実はね、不知火君」

「おう」

「貞子は、貞子に非ず」

「……………」

「……………」

しばらくの沈黙。

そして、英斗は眉間にしわを寄せたまま言った。

「……………」。「ごめん、意味がわかんねーんだけど」

「だ・か・ら！」

「おう」

「貞子は、厳密に言うとな貞子じゃないってことよ」

「……………」。「だから、さっぱりわかんねーから」

「やっぱ、筋道立てて話さないと駄目？」

「当たり前だろ。いや、待て。正直あまり知りたくないから言わなくていい」

「そんな選択肢はここに来た時点でアリはしないわよ」

「……………」。「だろうな」

「はいはい、そんなに不貞腐れた顔しない。いいから黙ってお姉さんの話を聞きなさい」

「——お前の場合、容姿的にはどっちかって言うとお嬢ちゃんだろう」

「これ以上余計な口挟むとこのコーヒーぶっかけるわよ」

「分かった分かった、聞くから！てかコーヒーかけるって言っているが持つてんのはお冷のボトルじゃねーか！」

「このくそ寒い時期にこれを背中に流し込まれたどうなるかしらねえ？」

「さらっと地味な嫌がらせ口走るのはやめろ。洒落にならん」

「馬鹿ねえ。ホントにやりはしないわよ」

「お前のその台詞は信用ならねーんだよ！」

「煩いわねえ。あなた普段はボケのくせに何で私の時はそんなに突っ込みまくってんのよ？」

「俺は大概常識を弁えていないが、お前はそれを大きく上回って非常識なんだよ。だから俺が突っ込まざるえなくなるんだろうが」

「ちよつと暴言よ。私が不知火君より常識ないなんて、そんなアホな」

「アホはお前だ。このカルトマニアが」

「別にマニアではないわ。カルトは下手な横好きだし」

「俺にそんな細かな差異が分かるもんか」

「でしょうねえ。そんなんだから貞子に関する事実に来るで気付かないのよ」

「…貞子に関する事実？」

「本題よ、本題。言ったでしょ？貞子は貞子に非ず。では貞子でないのならいったい何なのかって話よ」

「……………。何なんだよ？」

基本怖がりな英斗だが、やはり礼二郎に呪いのビデオを見せた負い目が若干あるようで、ようやく先を促す言葉をぼそりとはいた。

英斗の質問に満足そうに笑った樹々。

「ようやく関心を示してきたわね？なら考えてみて。あの貞子の都市伝説が流行ったのはいつ頃？」

「は？——だいたい……そうだな、一年くらい前？」

樹々の質問の意図が分からず、英斗は眉を寄せながら答えた。

「そう。約一年前。ま、実際には去年の四月頃だから、まだ一年たってはいないんだけどね。で、それを踏まえて思い出してみて。宮沢君の近くで何があった？」

「何って…ちよつと待てよ。礼二郎と貞子の都市伝説って何か関係あんの？」

「大ありよ」

「……………。大あり、ねえ。貞子伝説が流行る前だったら、ちよつどあいつのお姉さんが男と出て行った頃じゃなかったか？」

顎に手を当てながら言った英斗に、樹々はパチンと指を鳴らした。

「それよ」

「は？」

訝しげに問い返す英斗。

樹々は若干間を置くと、真剣な顔つきで厳かに告げた。

「貞子の正体——それは男と駆け落ち同然に家を出て行った、宮沢君の姉、宮沢礼奈なのよ」

第七話「貞子本人が自分のことを全部知っているわけではない」後編

トントントントントン――。

朝。小気味のいい包丁がまな板をたたく音と、美味しそうな味噌汁の匂いで、元礼二郎の姉の部屋のベッドで、貞子はゆっくりと覚醒した。

上半身を起こして、寝癖で所々乱れている黒髪をわしゃわしゃとかき回し、

「……………」

そのまま頂垂れた。

昨日のことを思い出したのだ。

――寝言とはいえ、間違いなく彼は、私のことを姉と認識していた。それは、隠していたわけではないが、なんとなく伏せていた事実。彼が気づいている、と言うことになる。

「……………」

そう思うと非常に出づらい。

貞子はどうしたものとベッドの上でうーうー唸っていると、だしぬけにドアが開き、

「おはよう、貞子さん。ご飯食べよ」

エプロン姿の礼二郎がニコニコしながら言ってきた。

あまりに唐突だったために、貞子は動揺して顔をあっちこっちにふりながら、「……………はひ…」と気の抜けた返事をしてしまっていた。その様子に、礼二郎は苦笑しながら、

「髪がすごいことになっているからちゃんと梳きなよ」

と言ってあっさりと引っ込んで行った。

――昨日のこと、覚えていないのか？

そのあまりにも軽い感じに、貞子はそう疑った。

思えば昨日の夜は相当酔っていたわけで。（それにしても二日酔いの気配は微塵もなかったが）

貞子は寝起きで回らない頭をシャキツとしたくなり、とりあえず礼二郎の言う通り、ベッドから降りて洗面室に向かった。

「いただきます」

「いただき……ます」

リビングのテーブルに並べられた純和風の朝食を食べながら、貞子は対面に座ってご飯を頬張っている礼二郎を盗み見た。

先ほど、飲みすぎて記憶がないのだと結論付けたはいいが、結局のところ、伏せていた事実を知られていることの否定にはならないことに気付いた。

「何？」

「……え……」

「いや、何かすごい睨んでくるから。まずかった？ご飯」

——いけない。

盗み見てるつもりが思いきりガンを飛ばしていたようだ。

礼二郎は困ったように首を傾げている。

「何でも……ない……ご飯……は……おいしい」

「そう？」

「……うん」

そこで会話が途切れ、若干気まずい空気の中で朝ご飯をひたすら消化していく。

「あのさ」

しばらくして、たくわんを咀嚼していた礼二郎は思い出したように声を上げた。

「な………何？」

「その………ね。昨日のことなんだけど」

来た。

自然にお茶碗を持つ手に力が入る。

昨日ことなんだけどと礼二郎が言った時点で、貞子はお酒で記憶がないという線を完全に捨てた。

そしてその台詞から礼二郎は事実を知っていることを貞子は確信した。

貞子が高実は宮沢礼二郎の姉、礼奈である——という事実。

これは確かに事実ではあるが、こう言ってしまうと若干の語弊がある。

正確に——というよりざっくり言ってしまうえば、礼奈の死体に礼奈の魂と貞子の魂が織り交ざった状態で入っている、と言うのが正しい。

何故このような状態になったのかは礼奈も貞子も全く覚えていない。

礼奈にとっては死んだ前後の記憶がなく、気がついたらショートカットだったはずの髪は腰近くまで伸びていて、仄暗い井戸の底で佇んでおり、貞子にとっては気が付いたら礼奈の魂が自分の中にいつの間にか溶け込んでいた。

そして訳が分からないまま、ビデオを見た人間を何人か呪い殺していた。恐らくこれが一年前に流行った貞子伝説の発端だ。

その時の礼奈と貞子は混ざったばかりで人格がうまく形成されておらず、呪いで死んでいく人たちを間近で見ながらも何の感慨も湧いていなかった。

そしてしばらくたった後、礼二郎と巡り合い、礼二郎が死ななかったが故に、貞子に染まりかけて止まっていた礼奈の感情はゆっくりと動き出した。

礼奈自身、貞子と魂が混ざったせいもあってすぐには生前のことを思い出せなかったが、目の前にいる礼二郎が弟であることをおぼろげながらも思い出し、それと同時にその事実を礼二郎から隠すようになった。

たった一人の姉はすでに死んでしまっており、化け物となってしまうなど、言う勇氣などさらさらなかったのだ。

「昨日……？」

「うん。……介抱してくれてありがとう。おかげで風邪をひかずに済んだ」

「……。別に……。いい……。酔っ……た……礼二郎……君は……。ちよつと面白……かつたし」

「そう？」

顔をそらしながら言う貞子に、礼二郎は苦笑した。

「礼二郎……君は……覚え……てる……の？」

往生際が悪かもしれないが、貞子は少し期待して言ってみた。

「もちろん覚えてるよ——姉さん」

貞子の期待も虚しく、満面の頬笑みで礼二郎は肯定した。

姉さんと呼ばれ、体が完全に硬直する。

「どしたの？」

「……… やっぱり……知って……… たんだ？」

「うん、まあ」

「……いつ……… 分かつ……… たの？」

「退魔師の一件よりちよつと前くらいからかな。似てたからそうなのかな——って。と言つても確信したのは昨日僕をレンジって呼んだからだけだね。ああ呼ぶのは姉さんだけだし」

「……… そんなに……… 早く……… から………」

かなり早い段階から感づかれていたことに、目を見開いて驚愕する貞子。

「というか、そういう事実がなかったら、いくら僕でも自分を殺してきた呪いの化け物とこんなに長くいつしよに生活なんて出来ないよ」

礼二郎の言葉に、それはそうだと呪いの化け物である貞子は納得し、それと同時につかえていた不安のようなものがすっと軽くなったような気がした。

取り乱すわけでもなく、こちらに辛くあたることもなく。

礼二郎は貞子が知らない間に自分の中で貞子と姉の存在を理解して、心の中で整理していたのだ。

それはほっとするような、釈然としないような、奇妙な感覚を貞子に与えた。

それが表情に出たのか、礼二郎は苦笑すると、

「別に姉さんの死をなんとも思ってたわけじゃないんだよ」

「…そう…なの…？」

「うん。……でも姉さんがかけ落ちどころか実は死んでいて、貞子さんと同一化しているとわかってても、正直ほとんど動揺しなかったんだ」

「……どう…いう…こと？」

聞きようによつては姉の死に何も感じていないと言っているように聞こえる礼二郎の台詞に、貞子は無性に悲しくなって顔を伏せた。

礼二郎は貞子が前髪に覆われたその顔を伏せたのが分かったが、特に触れずに先を進めた。

「あくまで多分……なんだけど、貞子伝説が流行り出した時期から考えても、姉さんは駆け落ちの日に何か、貞子にまつわる事件が何かに巻き込まれたんだろうと思う」

そこまで言つて、礼二郎は一旦言葉を止めると、心底辛そうに貞子を見て、

「そして——恐らく僕もそれに関わっているんじゃないかなって思

つてる」

「……………え……………」

貞子は呆けたような声を出しながら、顔をあげた。

——私がこうなった背景に、弟が絡んでいる…？

「実は僕、姉さんの駆け落ちから数日間の記憶がないんだ。だけど、いやだからこそ姉さんと貞子さんの一連の出来事に関わっているかもしれないと思ってね。そう考えれば、姉さんと貞子さんの今の状況をすんなり受け入れている自分の感覚に納得ができるし」

貞子は少なからず驚いていた。礼二郎も自分と同じように当時の記憶がないことに。

「私…も……ない…の」

「——え？」

礼二郎が聞き返すと、貞子は礼二郎を見据えなら、

「私も……………あの…時の……………記憶…が……………ない……………の」と言った。

「姉さ——いや、貞子さんも覚えてないんだ？」

貞子がゆっくりと頷くのを見て、礼二郎は少し落胆した。

貞子はすべてを知っているものと思っていた。姉がこうなってしまったことに、自分が関係していることを貞子本人から直接、明確に知りたかったのだが、当人が覚えていないのは誤算だった。

が、自分も覚えていないのに、同じように覚えていない貞子を責めるわけにもいかないので、彼は本音を言うことにした。

「僕は——なぜ姉さんと貞子さんがこんな風になったのかをちゃんと知りたい。僕に責任があるのなら、償いたいし」

礼二郎の言葉に、貞子はつらいものを飲み込むようにして呟いた。

「レンヂ……君に……とって……とても……悲惨な……真実……を……
思い……起こす……ことに……なる……かも……よ？」

「かまわないよ」

礼二郎の即答ぶりに、貞子は泣きそうな顔で礼二郎を見つめたのだ。
った。

第七話「貞子本人が自分のことを全部知っているわけではない」後編（後書き）

別に前編中編後篇に分けるひつようなかったかなw

プロローグ「倶楽部活動は自主性が大事」

『いよいよ明日から三学期ね、宮沢君』

「……ナルトさん、今何時だと思ってるの？」

冬休み最終日の午後十一時。

自宅のマンションで貞子とのんびりテレビを観ていた礼二郎は、電話してきた相手にうんざりした声で応対した。

『ナルトじゃない、渦巻。つーか、そのあだ名定着させようとするのやめてくれない？ 不知火君とかが調子乗るから』

電話してきたのは同じクラスでカルト好きの渦巻樹々だった。

「知らないよ、そんなことは。てか何の用だよ？」

『そうそう、用事なんだけど、宮沢君。あなた確か部活には入っていなかったわよね？』

樹々のいまいち真意がわからない質問に礼二郎は首を傾げながら、

「ああ、入ってないけど」

と素直に答えた。

『そうよね。あなたそういう他人とのコミュニケーションを必要とするようなことを進んでやったりしないもんね』

「大きなお世話だよ」

『まあまあ。……でさ、ものは相談なんだけど、私がやってる倶楽部に入ってくれないかなと思って』

「はあ？」

『その名も都伝倶楽部。都市伝説を始めとした心霊現象や怪奇現象を扱う倶楽部なんだけど』

「……。そういうのはあのツンツン頭でも誘えばいいんじゃないの？」

『あれは別の部活にもう入ってるし、金銭面以外で役に立ちはしないもの』

なかなかの辛辣で生々しい台詞に、礼二郎は思わず眉を寄せた。

「それだつたら僕はなおのこと、それこそ金銭面ですら役には立たないよ?」

高校生風情がマンションで生活できているのはひとえにそのマンションを経営している叔母のおかげである。

その他の生活費、学費等、叔母におんぶにだつこな状況ゆえ、彼自身が私的に使用できる資金は微々たるものだ。

『何を言つてるのよ? あなたはおそらくこの倶楽部じゃ、かなり重宝される存在よ』

「何を根拠に――」

礼二郎が言い返そうとするのを遮つて、樹々は言った。

『だつてあなた、靈感体質でしょ?』

ズバリ言われて礼二郎は息を飲んだ。

「……。誰から聞いたの?」

『誰でもないわ、そう思える節があなたと接してみても多々あつたら、カマかけてみたの』

「……………」

思わず押し黙る礼二郎をよそに、樹々は続ける。

『あとね、貞子とお姉さんのことも知ってるわ』

樹々の口ぶりに、姉と貞子の同一化や、自身の靈感体質が完全にはれていることを確信した礼二郎は内心感嘆した。

「……。流石だね、ナルトさん。どうやって知つたのさ?」

『簡単よ。あなたの家にお邪魔した時に貞子さんをみて『なんか似てる』って思つて』

「……。うちの姉と知り合ひだつたの?」

『いいえ。ただあなたの姉さん、女子の間じゃ駆け落ちしたことで結構有名になつてたら顔は知つてたの』

「あー……。そういうの好きだよねえ、女子つて」

『まあね。で、ちよつと気になって調べてみたら駆け落ちと貞子伝説の時期が近くてさ』

「ふーん」

『……………』

「……………」

二人の間を沈黙が流れた。

「それで？その倶楽部ってのは要は噂や都市伝説を検証する倶楽部ってことなのかな？」

『そうね。ぶっちゃけ私の趣味なんだけどね』

「へえ」

礼二郎は関心があるのかないのかよくわからない微妙なテンションで返事をする。

そして、受話器を持ちかえると、

「——その倶楽部、入ってもいいけど、条件がある」

『何かしら？』

そう来るだろうと思っていたので、樹々は別段嫌がる様子も見せず先に促した。

「参加は不定期でお願いしたい」

『……。構わないわよ？そもそも学校は公認してないし、部員は私一人だけだから。あなたには必要な時いてくれればそれでいいわ』
それで倶楽部と言えるのか？という疑問が礼二郎の頭を掠めたが、すぐにどうでもいいことだと思いなおした。

正直なところ、樹々の誘いは礼二郎にとって魅力的に映っていた。

姉と貞子に関する真実を知りたいと思っている礼二郎に足りないのは情報源である。

カルト趣味の割に社交的で友好関係が広い樹々。

姉と貞子の同一化にすら感づいた彼女と仲良くしておいて損はないという打算が礼二郎にはあった。

向こうもそれを何となく察した上で誘っているのだ。

「わかった、入らせてもらうよ」

断る理由はそもそもなかった。

『助かるわ』

どこかほっとしたように返事をした樹々。

その後、近いうちに詳しい話をする旨を決めて、電話を切った。

「……誰？」

受話器を置いてリビングのソファに戻ると、貞子が振り返りざまに聞いてきた。

「ナルトさん。倶楽部活動の勧誘だった」

「……………そう……………入るの？」

「一応ね」

そう言っただけで礼二郎はソファにちょこんと座っている貞子の頭を撫でると、貞子は少し目を細めてうれしそうに笑った。

りんぐ——終わり

プロローグ「倶楽部活動は自主性が大事」（後書き）

最後まで読んでいただき、誠にありがとうございます。

一応、「りんぐ」はこれで終了になります。

この話の続きは「都伝倶楽部」にて続けていこうと考えております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3102k/>

りんぐ

2011年7月31日15時34分発行